

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 趙 義成



学位申請者 金民（キム・ミン）

論文名 現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究

—動詞の連体形と被修飾名詞の共起様相—

【審査結果】

金民氏より提出された博士学位請求論文「現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究—動詞の連体形と被修飾名詞の共起様相—」について、審査委員会は論文を精査し、最終試験を行なった。その結果、審査委員会は本論文が本学大学院の学位授与の基準を十分に満たした優れた論文であると判断し、全員一致で金民氏に博士（学術）を授与することが適当であると判断した。

審査委員会は趙義成を主査とし、本学の五十嵐孔一教授、南潤珍准教授、学外から生越直樹教授（東京大学）、権容環教授（神田外語大学）、あわせて4名の副査をもって構成し、最終試験は2017年8月24日15時より公開で実施された。

【論文の概要】

本論文は、現代朝鮮語（金民氏が「韓国語」と称するものを、この報告書では「朝鮮語」と称することにする）の連体修飾構造、とりわけ動詞の(ha)-nyn 連体形（現在連体形）、(ha)-n 連体形（過去連体形）、(ha)-r 連体形（未実現連体形）による連体修飾構造の語彙的・文法的特徴について、豊富な言語資料をデータとして用い、それを分析、記述したものである。

論文の構成は第1章 序論、第2章 動詞による連体修飾構造の特徴、第3章 hanyn による連体修飾構造の特徴、第4章 han による連体修飾構造の特徴、第5章 har による連体修飾構造の特徴、第6章 結論となっている。

第1章では先行研究を概観している。連体節と被修飾名詞の関係について、多くの論者が名詞補文化という連体修飾構造において特定の連体形語尾と被修飾名詞の制約的共起に注目しつつも、共起の諸条件について詳細な記述が不足していることなどを指摘し、本研究が連体形による連体修飾構造の様相、および連体修飾構造を構成する諸要素と連体形の

意味との関係を実証的、包括的に分析する研究であることを明らかにしている。

第2章では個別の連体形による連体修飾構造の分析に入る前の基礎作業として、いかなる動詞が連体形を取りやすいか、いかなる名詞が連体形の被修飾名詞になりやすいかを概観的に調査している。その結果、動詞が連体形を取る頻度は他動詞より自動詞の方が高く、自動詞は状態変化、関係、自然現象に関連した動詞に連体形の頻度が高いことが判明した。また、名詞は事態や現象を指示する名詞や、時間名詞が連体形と共起しやすいことが判明した。

連体節と被修飾名詞の関係は、寺村秀夫の「内の関係（被修飾名詞が連体節内部の一成分になる構造）」、「外の関係（被修飾名詞が連体節内部の一成分にならない構造）」の概念を援用し、各連体形の分析においてそれぞれの関係を更に細分化して論じている。第2章では連体節と被修飾名詞の関係を概観的に論じており、*dui*（後ろ）、*hanpien*（一方）などの名詞が内の関係として現れないなど、偏りがあることを報告している。外の関係については、事柄名詞が被修飾名詞になることが多く、とりわけ(*ha*)-*nyn* 連体形がこの構造になる傾向が強いとしている。

第2章ではさらに、連体修飾構造の観点から見た動詞分類、名詞分類を提示している。これは第3章以降に示されている分析の結果得られたものをあらかじめ提示したものであるという。動詞分類においては、主に(*ha*)-*nyn* と(*ha*)-*n* に関わるものとして、主にアスペクト的な観点から分類がなされ、内的限界動詞として結果継続動詞、状態変化動詞が、また非内的限界動詞として動作継続動詞、心理動詞、知覚動詞が区分されており、更に時間の中での展開性を持たない関係規定動詞、状態動詞の2つが区分されている。

第3章から第5章まででは連体形による連体修飾構造を(*ha*)-*nyn*、(*ha*)-*n*、(*ha*)-*r* に分けて個別に分析しており、連体形を取る動詞の特徴、被修飾名詞の特徴、連体節と被修飾名詞の関係といった点を中心に、連体修飾構造の言語事実を客観的に分析している。

第3章では(*ha*)-*nyn* 連体形による連体修飾構造の分析を行なっている。ここではまず、(*ha*)-*nyn* の意味について、先行研究を整理しつつテンス的に非過去、ムード的に直説法、アスペクト的に不完了であるとし、「現在継続」、「超時」の意味用法があるとしている。次に、(*ha*)-*nyn* 形を取りやすい動詞、(*ha*)-*nyn* 連体形と共起頻度の高い名詞について、その特徴を述べている。動詞については、一定時間継続する動きを表す動作継続動詞や、知覚動詞、心理動詞など内的活動を表す動詞が多く、語彙的意味に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴を取り出しえない非内的限界動詞であること、また関係規定動詞の場合には(*ha*)-*nyn* が「超時」を表すことに言及している。動詞のアスペクトの特徴は(*ha*)-*go* 'issda（…している）形を取って動作継続を表すものが非常に多いことが指摘されている。一方、名詞については、時間的・論理的前後関係を表す名詞や、事柄名詞、

抽象名詞，現象名詞が多く，行なわれつつある行為，反復的に行なわれる行為と関連づけられている点を指摘した。次に，内の関係，外の関係という連体修飾構造の観点からの分析を行ない，内の関係は一定時間継続する動作や脱時間的な関係・概念を表す動詞に (ha)-nyn 形を取る傾向が強く，外の関係の場合には動作継続動詞と，行為，様子，方法，現象などを表す名詞とが典型的に現れたことを指摘している。

第4章では (ha)-n 連体形による連体修飾構造の分析を行なっている。初めに (ha)-n の意味について，動詞の表す事態が局面を分かち境界を乗り越えていることを表す形式であるとし，文脈によって「過去」，「完了」，「現在の状態」といった意味を表すものであるとまとめている。続いて (ha)-nyn 連体形の分析と同様に，(ha)-n 形を取りやすい動詞，(ha)-n 連体形と共起頻度の高い名詞を観察している。前者についてはアスペクト的に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴を持つ内的限界動詞であることが指摘され，また受動動詞が多い点にも言及がなされた。後者については時間的に「後」「末」を表す名詞や，「既に終わっている事柄を前提に何事かを言うような名詞」が多く，また具体的な実体を表す名詞も多いことを指摘している。連体修飾構造の観点からは，内の関係においては結果継続動詞，状態変化動詞の比率が大きく，名詞は具体的な実態を持つ名詞が現れる傾向があること，外の関係においては名詞に関して完了性を持っている名詞が多いという特徴がある反面，動詞に関しては内の構造ほど動詞に激しい偏りがなく，(ha)-n の意味の実現に被修飾名詞が重要な役割を果たしていることが言及された。また，(ha)-n については -ei daiha-n (…に対する)，-ei goanha-n (…に関する) など後置詞に現れる (ha)-n についても考察があり，被修飾名詞について精神的活動や言語活動を表す名詞が多いと報告している。

第5章では (ha)-r 連体形による連体修飾構造の分析を行なっている。(ha)-r はいわゆる未来を表す連体形でありつつも単純な未来ではなく，可能性，推測といったムード的な意味も表すとし，「話し手が自らの意図を込めたいときに選択的に用いる形式」であるとしている。次に (ha)-r 形を取りやすい動詞に意志動詞の割合が高いことに言及し，(ha)-n 連体形と共起頻度の高い名詞は時間名詞や事柄名詞などが多く，いずれも「ある未然の事柄について何事かを言う」という未然性を有していることが指摘された。連体修飾構造に関しては，内の関係である場合には連体形を取る動詞，被修飾名詞のみならず，上位節の用言や共起する副詞などの文脈条件によりその意味が最終的に決められるとしている。一方，外の関係の場合には，(ha)-r 連体形の用例のほとんどが外の関係の構造で現れ，上位節に `issda (ある)，`ebsda (ない) -`ida (…である) のような形式的な用言が接続し，全体で固定された分析的な形式として現れる傾向があることが指摘された。

以上，(ha)-nyn，(ha)-n，(ha)-r という3つの連体形の分析の結果，(ha)-nyn と (ha)-n は事

柄を既存の事実として客観的な態度で述べる形式であるという点において(ha)-r とムード的に対立しつつ、(ha)-nyn と(ha)-n は局面を分かち境界を越えているか否かでアスペクト的に対立しており、三者が対等な次元で3項対立を成しているのではないと指摘した。

【論文および最終試験の結果】

提出された論文に関し、審査委員会は以下の諸点を高く評価した。

(1) 作例等により主観的に分析するのではなく、膨大な言語コーパスをデータ化し、それを丹念に観察することにより、言語事実を客観的に捉えて分析を行なった。韓国国内においても言語コーパスを用いた研究が盛んにおこなわれており、今後韓国国内の研究との交流の側面でも、成果があったといえる。

(2) 連体形語尾の機能や連体節の意味ばかりに注目されてきた連体修飾について、動詞連体形、被修飾名詞、連体節の意味に分けて、それぞれの共起関係を精査することにより、朝鮮語動詞の連体修飾構造を網羅的に記述することに成功した。既存の研究では個々の連体形の研究がメインであり、また(ha)-rが(ha)-nynや(ha)-nと同時に論じられることが少なかつただけに、このような網羅的な研究は非常に貴重であり、かつ意欲的である。

(3) 例えば(ha)-nyn連体形に関し「hanyn志向動詞」「hanyn志向名詞」のように「志向する」という概念を導入することにより、連体を取る/取らないという二分法的なきつい区分ではなく、境界の曖昧さを肯定的に捉えることで、言語事実のグラデーシヨンの様相をよりリアルに描き出すことに成功している。

(4) 共起関係、連体節の意味関係といった連体修飾構造の観点から、動詞および名詞の分類を試みたことは、動詞や名詞を語彙-文法的な特性によりどのようにカテゴライズするかという点において、今後の研究に対しても示唆を与える面が多い。

(5) それぞれの連体形を取りやすい動詞、連体形と共起しやすい名詞を数値によって提示し、それぞれについて特徴的な傾向があることを明らかにした。このことは、本論文の中では明確に語られてはいなかったが、上記の動詞および名詞の語彙-文法的な分類と併せて、朝鮮語教育への応用の可能性も期待することができる。

このように評価される点がある一方で、以下のような課題も指摘された。

(1) 論文において中心的な話題に関わる用語（例えば「述語性名詞」、「副詞性」など）について、あるいは動詞分類、名詞分類を行なうに際して（例えば「抽象名詞」と「事柄名詞」の違いなど）、あるいはその定義が不明瞭なものがある。

(2) 動詞分類や名詞分類、また連体節の個々の意味など、個別的な問題の記述は非常に充実しているが、それら個々の言語事実を記述することに終始している感が少なからずあ

る。動詞，名詞，連体節の意味がどのように関連しあっているか，連体節として総体的に
いかなる様相が見られるかという全体的な視点からの記述がさらに求められる。

(3) 動詞分類がアスペクト的な分類に偏っている嫌いがある。また，連体形の文法機能
に関しても，アスペクトとムードを重視し，テンス的な視点が弱い部分がある。多くの先
行研究で連体形のアスペクト，テンス，ムードが総合的に論じられていることを見る
とき，本論文の偏重的な記述は再度考慮する必要がある。

最終試験の質疑応答において，金民氏は質疑に対して的確に応答し，また論文の問題点
を十分に認識しており，今後の研究にそれらを改善させる意欲を見せた。このような最終
試験を経て，審査委員は上述の問題点を踏まえた上でなお，本論文が学術的に優れた論文
であるということに意見が一致した。よって，審査委員会は全員一致で金民氏に博士（学
術）を授与することが適当であるという結論に至った。